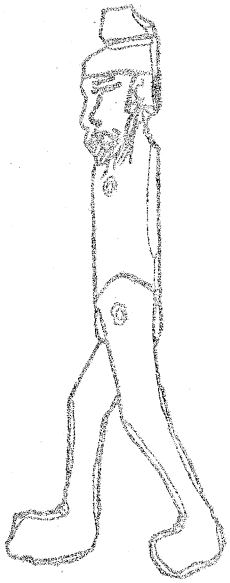
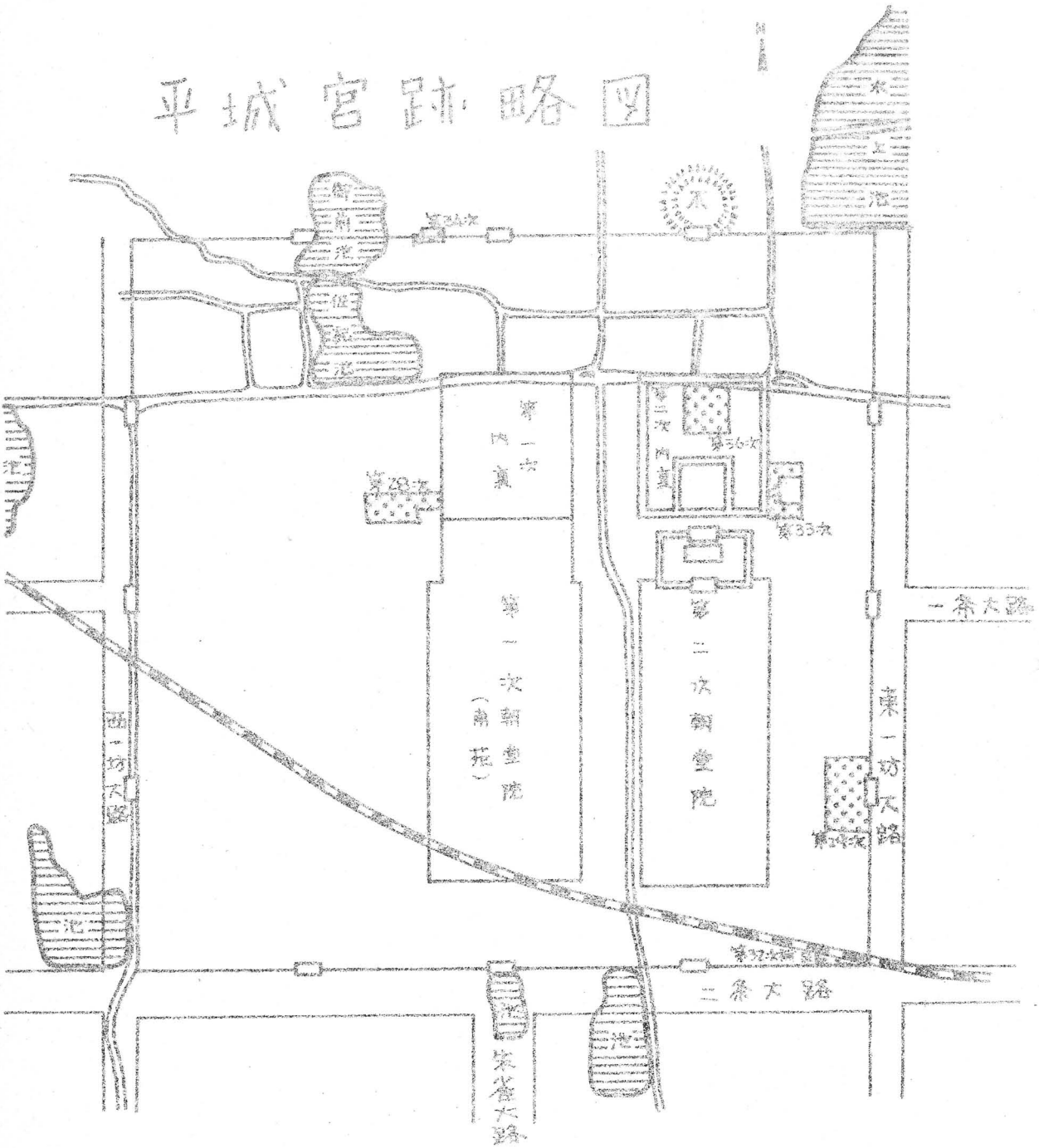
平城宮第28.29.33次発掘調査概報



昭和41年11月

奈良国立文化財研究所

平城宮跡略図



裏紙カット

第32次調査出土人形

平城宮跡28.29.33次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、昭和41年度の特別史跡「平城宮跡」の発掘調査を、第28次以降第36次までおこなっている。ここでは前回報告した第32次にひきつづき第28次、29次、33次34次について、その概要を報告する。また32次補足調査も併せ報告する。

第28次調査は第1次内裏想定地域の西側、第29次は東面南門周辺、第33次は第2次内裏東側の外郭■地域でおこなった。

以上の各次別の調査地区、発掘面積、各期間は次表の通りである。

次数	調査地区	面積	期間
第28次	6ACC－C・F	32a	40.9.16 ～41.3.18
第29次	6AAG－M 6AAH－C	41.75a	41.7.1 ～
第32次補足	6AAI－C	11.81a	41.5.1 ～41.10.22
第33次	6AAD－H.I 6AAE－J	29.3a	41.5.2 ～41.8.15
第34次	6ACA－D.E	19.3a	41.5.12 ～41.5.26
第36次	6AAP－M.N.O.P	56.0a	41.7.27 ～

I 第28次調査

調査地域は、佐紀池の南にあたるいちだん低い区域であつて、小字「池尻」に属し、第1次内裏想定地域の西側である。

遺構としては、溝、土坑のほか、柵3条を検出したにすぎなかった。

発掘地域東部では、南北に走る柵SA3853－A（柱間2.85m）とSA3853－B（柱間2.85m）を重複して検出した。

また、これらから西へ約46mはなれて、南北の柵SA3855（柱間2m）があった。

本地域西部は東部より約1mほど低く、東よりに、発掘地域外に延び

る南北溝ＳＤ３８２５（幅約３m）がある。西方からこの溝に注ぐ東西溝２条ＳＤ３８３８（幅約１.４m），ＳＤ３８３９（幅約１.６m）は，その東半部で土坑ＳＫ３８３３によってほとんど破壊されている。
土坑ＳＤ３８３３は，重複し群集する土坑がひとつになったもので，局部的に著しい量の瓦堆積を検出した。削平をうけて底石だけをのこす玉石溝ＳＤ３８３４は，流出口と考えられる場所に合掌作りの木組施設のあるところから，暗渠であったことが推察される。

そのほか，発掘地域中央にＬ字状に曲る溝ＳＤ３８４５（幅０.６m）と西端に地域外に延びる東西溝ＳＤ３８４１がある。

平城宮以前かと思われる遺構に，発掘地域中央を斜めによぎる溝ＳＤ３８４０（幅約１.６m）があり，溝底より弥生式後期の土器片を検出した。

出土遺物は少ないが，おもなものとして，南北溝ＳＤ３８２５から木製百万塔未完成品１基，木製漆装柄頭，木簡７５点がある。そのほか土器，瓦等と円座・帯があった。

以上の発掘結果から，遺跡の性格を判断することはむずかしい。遺構，遺物がきわめて少ないことが当地域の特徴であり，さらに今後の隣接地域の調査成果をまつものである。

Ⅱ　第29次調査　東面南門周辺

調査区域は，東面南門（的門）推定位置とその西側一帯である。

発見した遺構は，建物２７棟，柵１０条，築地２条，溝２６条，土坑２ヶ所，柱穴群である。この地域一帯は，地山が東南方向に傾斜しており，かなり大がかりな整地がおこなわれていた。各遺構は複雑に重なりあっているが，４期に大別することができる。

Ａ期　東面大垣（ＳＡ４３４０）と西側雨落ち溝，建物２棟（ＳＢ４３３１，ＳＢ４３４８），柵１条（ＳＡ４３３７），溝３条（ＳＤ４３３４，ＳＤ４３３５，ＳＤ４３９５）をこの期に当てることができる。大垣は掘り込み地形がなされており，掘り込みの深さは約３５cmである。

この地形は門推定位置の北方で終っており，その部分で東に折れ曲がる可能性がある。

B期　溝6条（SD3410，SD4358，SD4359，SD4376，SD4377，SD4386），建物5棟（SB4398 SB4345，SB4351，SB4372，SB4375），柵一条（SA4387）が考えられる。

C期　SD3410の西側で各所に暗渠施設を検出したので，ここに南北方向に築地等の構築物が存在したと考えられる。なお，この他に建物4棟（SB4347，SB4357，SB4368，SB4374），柵2条（SA4353，SA4360）を本期に当てることが可能である。

D期　主要なものは，建物1棟（SB4364），柵4条（SA4332，SA4336，SA4339，SA4393），土坑1ヶ所（SK4342）である。SA4332とSA4336とにはさまれた部分にはかなりの数の建物のものと考えられない柱穴があり，これも当期であろう。

遺物　SD3410にもっとも多く，木簡，土器，瓦，木製品などが出土した。土坑（SK4355）では和銅4年の年号のある木簡を検出した。特殊なものとして，土錘，フイゴ，鉄滓があり，この多くがD期の土坑からの検出である。

以上，第29次発掘調査では，地区内で東面南門と考えられる遺構が検出されなかった。
むしろ，築成土の範囲から考えると，大垣が推定東面南門の北方まで延び，さらに東方へ折れまがる可能性がある。
東方の地域の今後の発掘調査が期待される。

Ⅲ　第32次補足調査　宮城東南隅

第32次発掘調査は国道24号線バイパス敷設に伴なう緊急調査として，すでに宮城東南隅外側の東一坊大路，二条大路の交叉点でおこなったが，今回はその補足調査として，宮内東南隅の発掘を実施した。

検出したおもな遺構は，南面大垣と築地1条，建物2棟，柵3条，溝4条，炉4ヶ所である。これらの遺構は大きく2期に区別することが，層位的に可能である。なお，上，下両層で旧地表面を部分的に確認できた。

遺構

A期　この期に属するものは南面大垣，築地と溝などである。南面大垣（SA4120）は築地本体，犬走りが削平されていたが，基底部（巾13尺）と北側の雨落ち溝を確認した。

大垣から約40尺北に，大垣と並行に築地（SA4150）の基底部を検出した。巾10尺で，掘り込み地固めをおこなわず，地山を削り出して造っており，旧地表面より約10cmの高さで残存していた。
築地は特に東側で削平がいちじるしく，東端の状態は不明である。
築地には，副え柱をもつ棟門（SB4155）が付設されており，柱間寸法は10尺である。この築地に取りつくと考えてよい柵（SA4142）も検出した。門の西方に南北溝（SD4190）があり，築地部分では暗渠となっており，大垣の雨落ち溝に注いでいる。

B期　この期に属するものは，建物2棟，柵1条，溝4条，炉跡4ヶ所などである。

まず，南面大垣は大きく修復され，基壇巾は北側で約10尺拡張され，犬走りに相当する部分には礎石がある。雨落ち溝はごく小規模なものになっている。大垣のこの修復にともなって北側は広範囲に整地されこの整地面に建物，炉が作られている。
建物は礎石を使ったものである。炉跡は発掘地域の西端に4ヶ所検出したもので，いずれも整地層に掘り込んだ穴の底の部分が残存し，この部

分は強い火熱をうけている。炉跡附近では、レンガ、銅滓などを発見した。これらの年代は奈良時代末期から平安時代初期のものとすることができる。

遺物　全域で、木簡、瓦、土器、金属器、木製品などを検出したが、特に木簡は大垣北南落ち溝で1万点以上出土し、大部分が式部省関係のものである。また金属製品は、第32次調査の際、外堀から大量に検出した帯金具、工具、飾り金具などと同様なものを多数認めることができる。また、フイゴ、銅滓などの出土も多く、炉が宮城のある種の工房と関連したものと考えられる。

Ⅳ　第33次調査

第33次調査は、第2次内裏東側の外郭部にあたり、昨年度の第26次調査地域を□形に囲む地域でおこなった。

検出したおもな遺構は、礎石建物2、掘立柱建物10、築地2、柵5、溝4、玉石敷道路、井戸などである。これら遺構は、A・B・C・Dのほぼ4期にわけて造営されたとみることができる。

A期　　A期の遺構には、南北築地、東西築地、その角にとりつく建物・門、礎石建物、掘立柱建物、溝、暗渠等である。

南北築地SA705は、すでに第13次、第19次、第21次調査の際検出した第2次内裏の外郭をめぐる東面築地の南延長部にあたる。第26次調査の分とあわせると、柱間（2.97m）21間分を検出したことになる。

この築地と内裏内郭を囲む築地回廊の東南隅をつなぐ東西築地SA4230がある。このSA4230とSA705の接続部外側に方1間の礎石建物SB4215（柱間2.95m）を検出した。角楼のごとき建物かと思われる。またSA4230にSB4215から約4m西へはなれて門SB4235が開いている。5間以上×4間の南北棟東西廂付礎石建物は築地SA705から西へ約6mはなれ検出した。この柱間（4.45m）は、宮城内で発見した建物のうち、朱雀門につぐ

広いものである。SB4300の西に、幅4mの玉石敷道路SX4285をへだてて、2間×9間の南北に長い等間の建物SB4290（桁行26.8m、梁行5.94m）があり、その北に同規模とおもわれる2間×8間以上の建物SB3530（梁行5.94m）が柱間2.5間分をへだててたっている。これには南から7間目に間仕切がある。

雨落溝はこれら建物の三方をめぐつており、東西溝SD4240に注いでいる。そのほか第26次検出のSB3480の西妻延長線上に西側柱列をおく2間×3間の南北棟SB4265（桁行7.4m、梁行4.8m）があり、さらに柱間2.56mの東西柵SA4245がある。

東西溝SD4240は、築地回廊入り隅から始まる内裏内郭の排水溝と思われるもので、SB3530の前で南折し、さらに東折して東西築地に沿つて内裏外郭外へ延びている。この溝は築地SA705の下では玉石積の暗渠になつており、回廊に接する部分では板を組んで幅80cmの暗渠になつている。

おそらく回廊下も同じ構造であろう。この暗渠の外は底石を側石に凝灰岩切石を用いている。他の部分でも凝灰岩粉末および切石据付痕跡があり、溝全体に凝灰岩の切石を使用したものであろう。

B期　掘立柱建物2棟がある。第26次の調査で一部を発見した南北棟SB3520（桁行19.2m、梁行15.4m）はSB4290とSB3530とに重複して南北端を検出し7間×5間と判明した。この建物は身舎の東西に廂（梁間2.97m）がつき、さらに東側へ孫廂（梁間3.4m）がついている。SB3520の南4.7mで5間×2間の南北棟SB4270を検出した。西側柱列はSB3520の西廂側柱に揃え、東側柱列はその妻柱列に揃えている。

C期　C期はSB3530に重複する2間×5間の南北棟SB3550（桁行14.9m梁行5.6m）1棟のみである。やや方位が北で西へふれている。

D期　2棟の掘立柱建物と井戸がある。

2間×5間の東西棟SB3430（桁行13.45m、梁行5.2m）はS

B705の南端で築地雨落溝から西へ1.9mのところで検出した。
2間×2間の南北棟SB4255（桁行4.9m、梁行4.0m）の西側柱列はSB3430の西妻柱列と揃えている。さらにこの2棟に囲まれて方1.2mの井戸SE4250がある。
井戸枠は、垂木、床板の転用材である。

出土遺物には、瓦、陶器、土器がある。おもなものとしては、王石敷道路SX4285上で数十片の三彩釉杯片があり、東西築地SA4230の両側では軒丸瓦（6311）・軒平瓦（6664－D）が交互に並んで屋根からずり落ちたかたちで発見された。同時に検出した大量の丸・平瓦には、司・矢・田・修・冬・目・里・理の刻印があった。

今回の調査で検出した遺構のうち、造営時期が推定できるのはA期である。この期の建物が2.95m（造営尺10尺）を規準とした等間であることと、柱通りがその10尺方眼上に揃うことから、第2次内裏造営期Ⅱ－1期に比定することができる。
また東西の築地SA4230があることから、内裏外郭がこの部分で区切られることが判明した。

Ⅴ 第34次調査

この調査は、現状変更に伴う緊急調査で、調査地域は宮城北縁中央から西へ寄った御前池に隣接する民有地である。

検出した遺構は、わずかに溝、井戸であるが、すべて平城宮以降のものであった。

発掘以前に予想した宮城北縁をかぎる築地・柵の位置は後世の削平をうけており、確認することはできなかった。

Ⅵ 第32次補足調査出土木簡

形式

(015) 去上 位子従八位上伯祢廣地 年卅二 河内国安宿郡

(015) 去上 従八位下□ □守公麻呂 年五十四 河内国志紀郡 上日千百十□□

(015) 依遣高麗使廻来 天平寶字二年十月廿一日 進二階叙

(011) (表) 合一百卅八人 七人八位 二人勲位 卅三人初位 一百六人无位 應進階卅九人

(裏) 大炊寮

(015) 大学寮解 申宿直官人事 直講正八位上濃宜公水通 天平寶字八年八月十一日

(032) (表) 无位田邊史廣□(調カ)進稽労銭伍百文

(裏) 攝津国 住吉郡 神亀五年九月五日 勘□(錦カ)織 秋逢

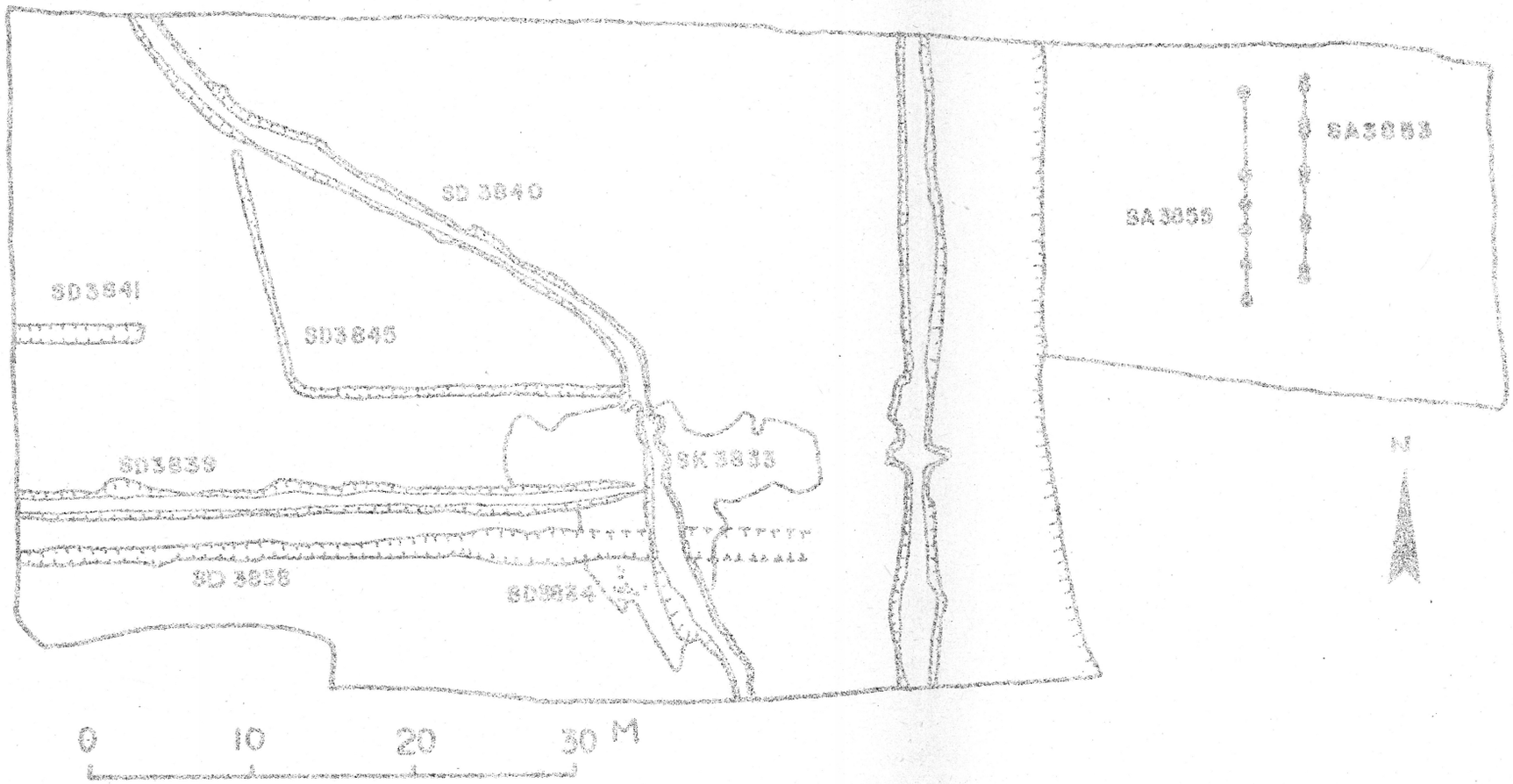
(061) (表) 諸司移

(裏) 神護景雲 三年 (題籤)

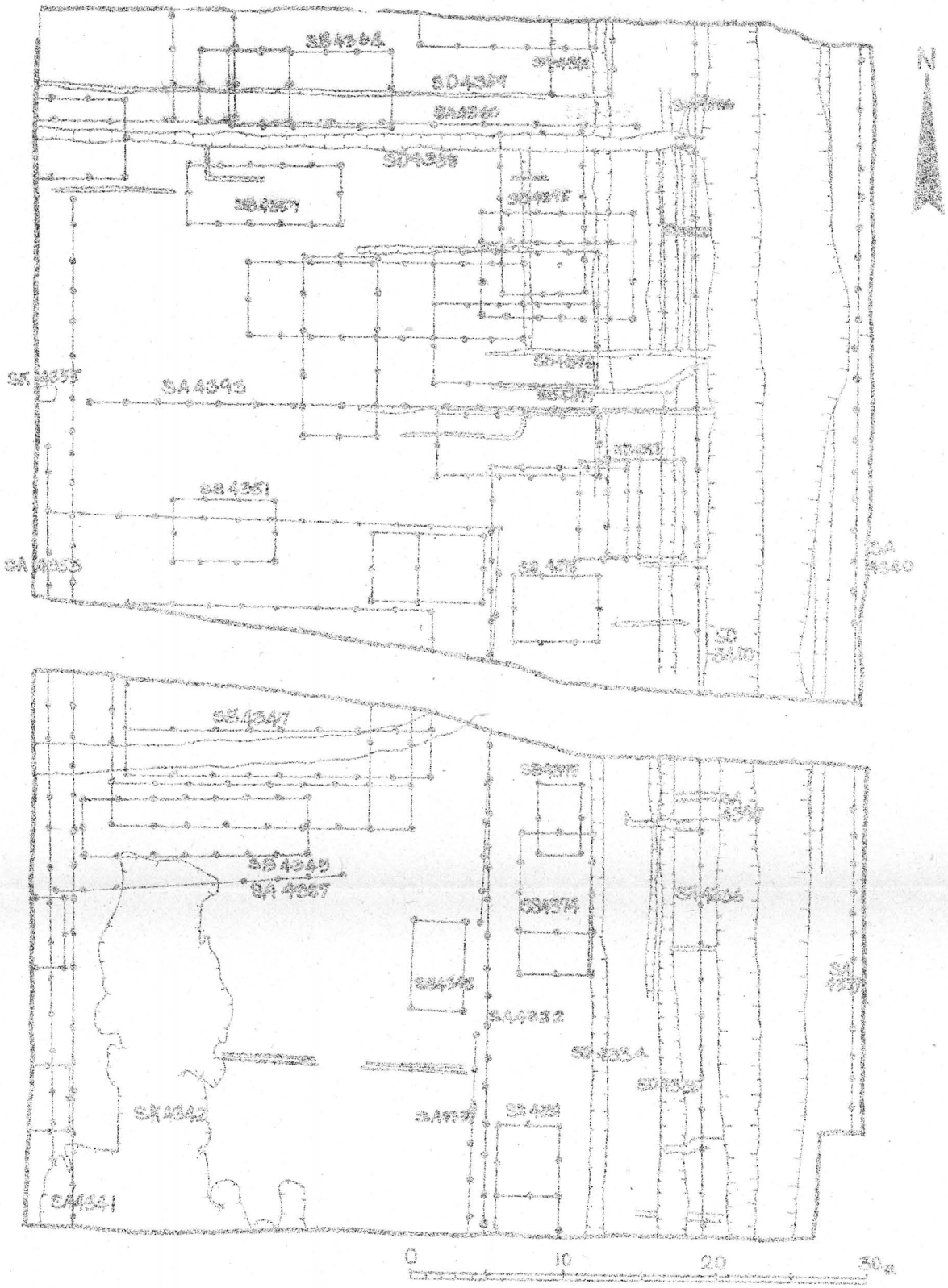
(031) (表) 駿河国駿河郡古家郷戸主春日部与麻呂調煑堅魚捌斤伍倫

(裏) 天平寶字四年十月専當 国司掾従六位下大伴宿祢益人 郡司大領外正六位□生部□理

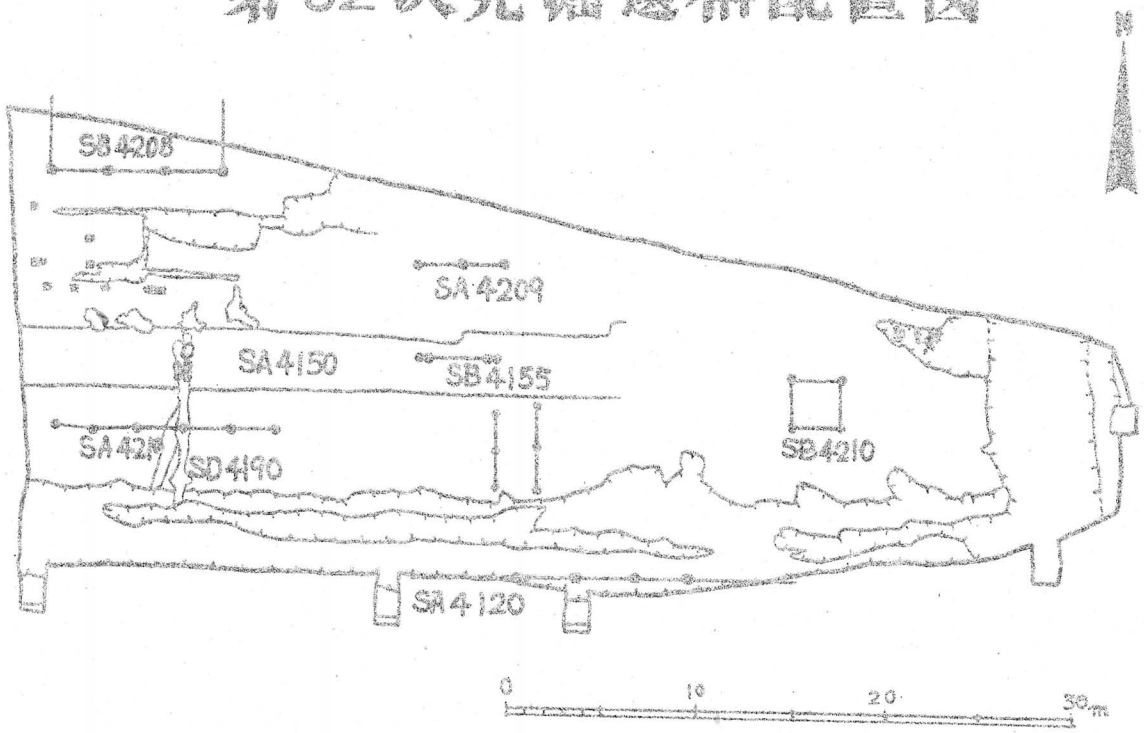
第28次発掘遺構配置図



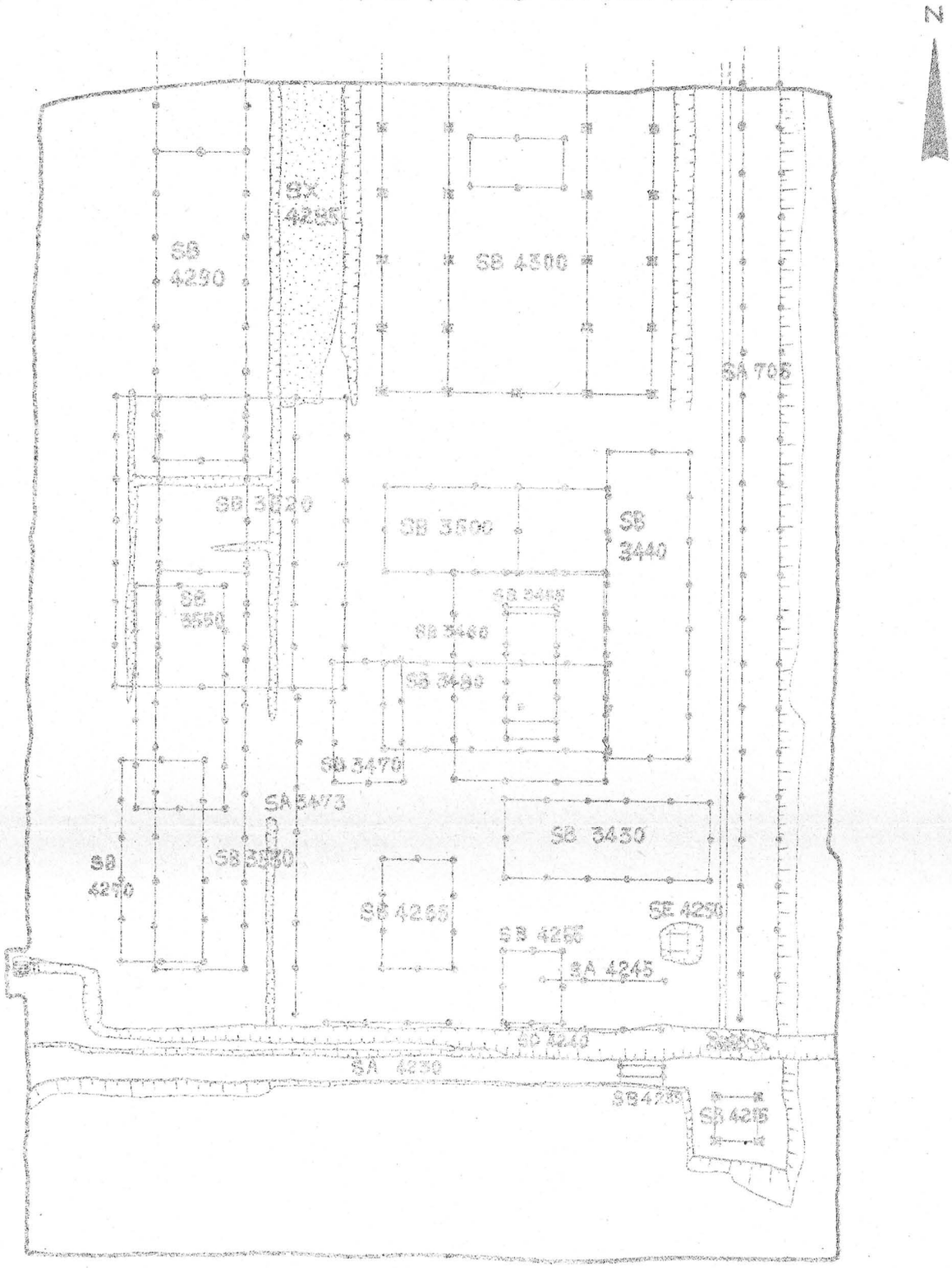
第29次発掘遺構配置図



第32次発掘遺構配置図



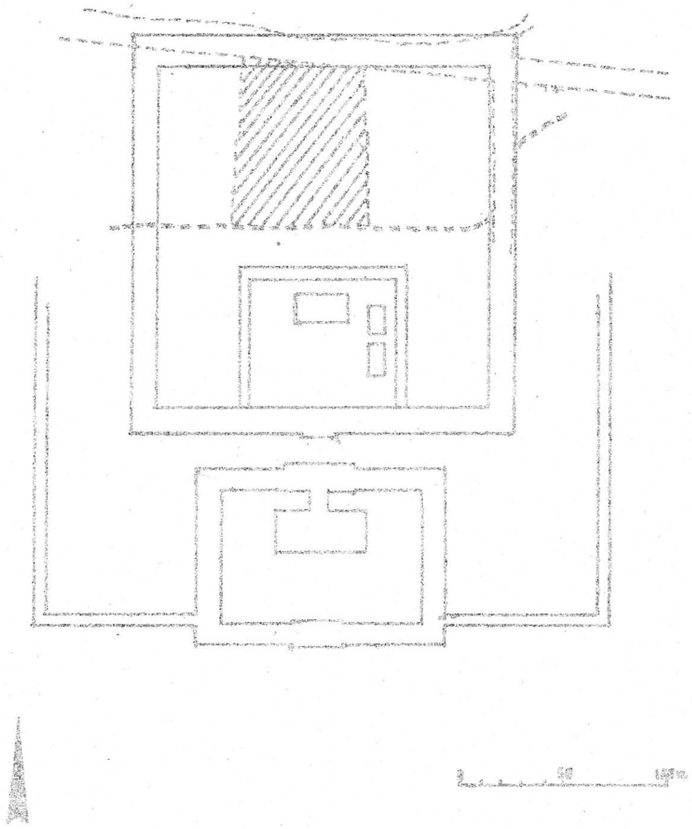
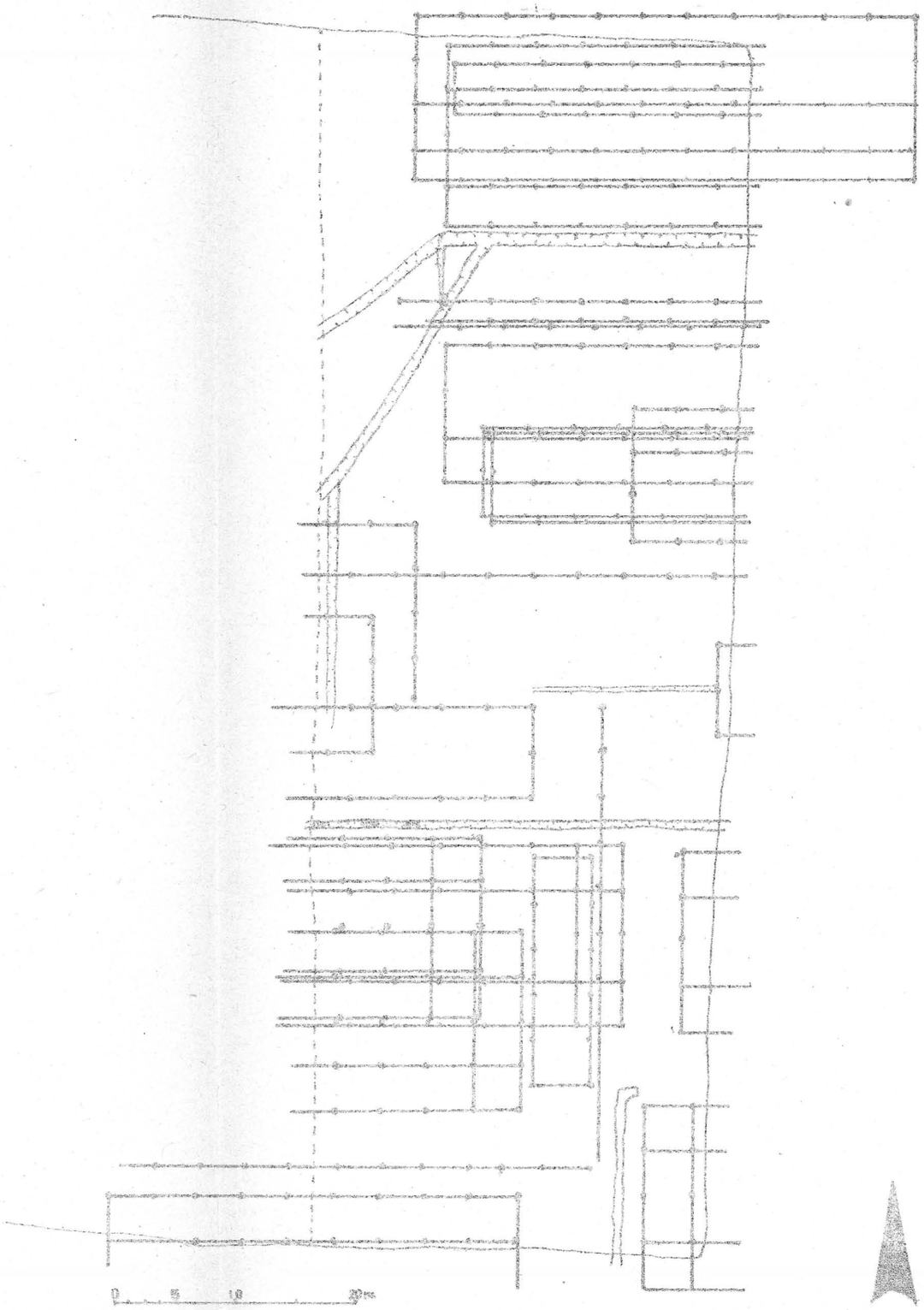
第33次発掘遺構配置図



（注、前回の第26次の分もあわせて）

0 10 20 30m

第36次発掘調査地区



東半部遺構配置図